

の平均収量は20 t / haに対し、農家の平均収量は10 t / haと言われています。

3. 従来、いも類の用途はほとんどカレーの材料としての食用に限られていました。今後は種々の加工食品の原料として用いることによって、いも類の需要も増加しますし、国民の食生活も豊かになると思われます。

おわりに

1年余りの滞在でしたが、あっと言う間に過ぎてしまった感じがします。スリランカには丁度30年前に2年間派遣されたことがありましたので、あまりカルチャーショックは受

けませんでしたし、対日感情も昔と変わらず良好でした。しかし、自動車の増加はめざましく、これに付随して、人口の都市集中が著るしく、職を求めて農村から出てくる人々や豊富になった町の商品を買い求める人々が都会につめかけます。また、都市近郊からの通勤や通学が可能になったため、昔は静かな古都であったキャンディも車と人が渦巻く街になりました。このために農業従事者が減少し、特に長大作物であるいも類の生産が衰退するのが心配です。

モンゴルでのサツマイモ試作

モンゴル（モンゴル人民共和国および中国内蒙古自治区）は、あまりにも日本人にとってなじみのうすいところである。私もこれら地域について、どのような概念・印象をもっているであろうか。国土のほとんどが砂漠で、森林・農地がほとんどなく、北方に位置していても高原であり、夏が短かく冬が長くて寒さが厳しく、したがって産業は牧畜くらいしかない、といったところであろうか。

★

そのモンゴルに、最近国際馬鈴しょ研究所（CIP）で育成された品種を用いてサツマイモ栽培が試みられている。サツマイモは元来温暖地を含む熱帯・亜熱帯の作物ではあるが、また、かなり冷涼な地域でも驚くほどの高収をあげることができる、とCIPでは考えている。試作地は北緯42度、標高1,400mで、年平均気温4℃であるが、育成品種を用いてヘクタールあたり45トン

以上の単収が得られている。モンゴルでは、サツマイモの価格は非常に高く、ジャガイモの2倍ないし3倍であるから（そのジャガイモも高級野菜としてかなり高価である）、政府もこの地域の農民も、有利な作物としてとり入れられるかどうか、試験の結果を大きな関心をもって注目している。

★

研究者たちは、将来サツマイモ生産適地の範囲を、いままで考えられていた以上にひろげることが可能であるかもしれない、とし、それによって収入の少ない人たちも、サツマイモを食べることができるであろう、と考えている。

もしそうであれば、東北部・北海道南部でも十分にサツマイモの経済栽培は可能となるが、モンゴルでの試作の方法、収穫物の品質等についての詳細は不明である（本誌第41号18ページ参照）（編集部）。